

# 山とスキー

第八十七號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
昭和三年十月廿八日印刷納本

昭和三年十一月一日發行（每月一回）  
（一日發行）

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 七 十 八 第

.....

記 事

登山の本質に關する一考察

伊藤秀五郎〔一〕

スキー材とワツクスと雪質溫度に就て

中村新一郎〔六〕

ログケビン及びカッターデ

其の建築法造作飾付及び家具の造方

伊東虎夫譯〔七〕

〔聖山〕批評

加納一郎〔六〕

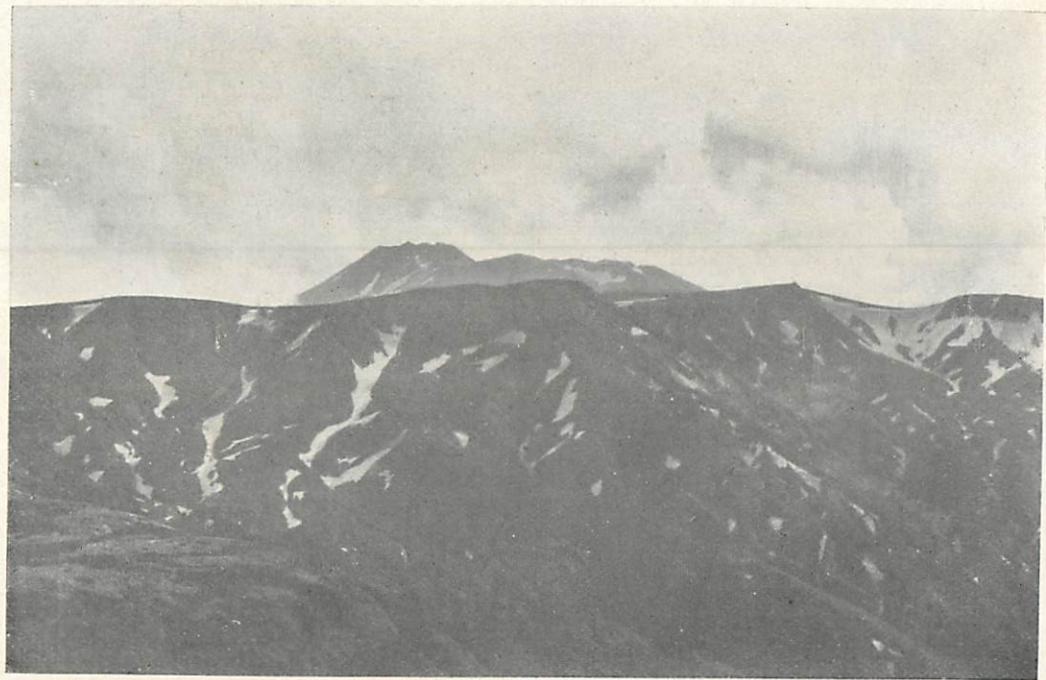
寫 眞 版

忠別岳の頂上よりトムラウシ山を望む

渡邊千尙

Military ski race.

昭和三年十一月發行



## 登山の本質に關する一考察

伊藤 秀五郎

歐洲に於ける登山の歴史は既に、十六世紀の中葉にその發達の胚葉をもつてゐる。それ故に、山登りに就いて直接必要な、例へば山の地誌的方面に關する山岳誌や、技術的方面の著書は、今日に於て決して尠くはないのである。更に、登山記録や紀行文等の單行本の形に於て公にせられたものに就いても、私達の耳に親しい高名な著書でさへ枚舉に遑ない程である。此に反して登山家らの山に對する思想的な方面、言葉を換へるならば、所謂山登りの「Moral side」に就いて書かれたものの、量に於て甚だ尠いことは敢てここに言ふまでもないことである。私達は、多くの登山家らの山に對する優れた考察や思索の片々を、短い感想文や、單なる紀行文や、或は更に技術的な方面を書いたものの中に僅かに見出すに過ぎないのである。況んや、登山の本質に關する思索的な考察を、具象的な言葉をもつて説明して、山登りの本質を闡明してゐるものを殆んど知らないのである。この點に關しては、私達は、ただ多くの優れた登山家らの「重厚な、而も穩かな、或ひは鋭い」山への考察を盛つた言葉の中に、暗示的に含まれてゐるそれら思索の陰影を、馳けながら窺ひ知るに過ぎないであらう。そしてそれらの優れた登山家らに比するまでもなく、私のごときは、登山家と呼ばれることすら恥しい程の、實に僅かの歩みをなしてゐるに過ぎないものであるが、而も敢へて、ここに、登山の本質に關する自分の貧しい考察を叙べる所以のものは、絶えず山登りについて眞摯なる關心をもつもの一人として、この一方に於ては近代の

スポーツの一つに數へられ、他面に於ては一つ思想であるとまでいはれてゐる登山の、本質に關する未熟なる試論として、これに對する先輩の教示を得たいと思ふに外ならないのである。

想ふに、登山の本質を、短い言葉を以つて完全に言ひ現すことは甚だ困難なことである。何となれば、かかる簡單なる言葉をもつてするには、山登りは餘りにも範圍の広いものであり、餘りにも多くの問題を含んでゐるからである。山登りの、その背影とする自然、對稱とする山岳を、文學的に取扱ふならば、そこに山岳文學が生れ、或はまた、山登りの一つの手段に過ぎない岩の斜面に於ける技術のみをもつて全体的な生命とする岩登り、即ち一つの小さな岩稜や、岩面を上下するやうな、全く單なる身体的の運動に過ぎない岩登りも、たまたま一般的には登山の中に數へられてゐるやうに、私達の山登りに對する認識は、極めて漠然としてゐるのである。そこに、登山の本質に對する多くの謬見が自ら胚胎してゐるのではあるまいか。

最初に、私は、山登りとスポーツとの關係に就いて考へてみたいと思ふ。登山も亦、スポーツといふ概括的な一つの言葉を以つて普通に呼ばれてゐるのであるが、山登りの本質から考へてこれは決して穩當な言葉ではないと思はれる。山登りは、明かに、單なる遊戯や身体的の運動でなく、また所謂スポーツの大部分を占めるところの多くの競技的運動とも全く異つた立場にあるものであるからである。勿論、山登りに於ても他の競技的運動と共通な部分は存在する。即ち、山登りにあつても身体的勞力を必要とする。そして山登りの一部分である登高といふ點にのみ就いてみるならば、他の一般スポーツと均しく、それは、懷疑と感傷の脱却に出發し、精神的身体的の健康を約束するところのものであることは言ふを俟たない。然しながらそれが山登りの總てではない。それは單に山登りの身体的の方面に過ぎない。恐らく山登りに於て、他のスポーツと共通するところはその一點である。それ故に山登りを單に一つのスポーツといふことは不穩當であると考へられる。寧ろ山登りにはスポーツ的一面が存在する、といふべきではないであらうか。言ふ迄もないが、私はここで一般のスポーツ論をするつもりではない。私は飽くまでも山登りの本質に就いて論じてゐるのである。そしてまた、

山登りと他のスポーツの優劣論をしてゐるのでは勿論ない。私は、山登りを純然たるスポーツとは考へないのであるから本質的に他の何れのスポーツとも、優劣を論ずることは不可能である。單に競技的運動の中にあつても、その種類に依つて決して本質的な優劣の存在しないことは、藝術の種類に依つて上下の別なく、職業の種類に依つて尊卑の差のないと同様である。而も私達は趣味の好悪をもつて優劣を判断しやうとする誤謬に陥ることがしばしばある。——(自然科学に於ける物理学・化學・生物學の哲學的關係等はまた自ら別の問題であるが)そして本質的に山登りの對稱とするところは、自然であるが、(一つのバーテイに於ける對人關係の如きは全く別の事柄である)他の運動競技は飽くまで對人的のものである。そこにも、その本質に於て山登りの他の運動競技と異なる重要なポイントが存在する。更に、山登りには、思想的精神的方面を多分に含んでゐるのである。それ故に、山登りは、所謂スポーツなる名稱の下に呼ばれてゐる競技的運動とは、その本質に於て全く異なるものである。このことは、已に、登山家らの主觀的立場から、しばしば言はれてゐることなのである。即ち、ある登山家は、明かにかういつてゐる。

「スポーツ、趣味、勿論さうぢあないだらう。俺だつていま現在、俺の山登りはスポーツだとも思つてやしないし、趣味なんかでもない……………」(登高行第五年、潤澤の岩小屋のある夜のこと、大島亮吉、参照)

かつて英國山岳會の會長であつたノーマン・コーリイは「ヒマラヤ其他の山脈に於ける登山」のうちの有一章に於て次の如くいつてゐる。

「……………まづ山に登ることの愛に就いてみるのに、私はこれをアクイーズな徳と呼ぶのが正しいと思ふ。ある人はそれはひとつの思索であるといふが、それは誤つてゐる。何となれば、山に登るにはたとへば思索冥想を以つてなすことが出来ないからである。而してまた登山家の態度は決して全然能動的なもの、即ち單なる身軀的な運動ではなく、その一部分は思索であり、冥想の境地であらねばならないと、私は思ふのである。」(J. Norman Collie, Climbing in Himalaya and other mountain ranges) この言葉には、明かに、登山の單なるスポーツと異なるといふ考へが述べられてゐる。それ故に

登山の本質とは全くはなれた岩登りなる他の一つのスポーツにのみ趨かうとする最近の傾向に對して、登山者の立場からしたフランツ・ニーベルの警告は、まことに當然なことであつた。

更に、多くの登山家の文章が、如何にしばしば私達にまで、詩を感じしめるかといふことは、自ら山登りの輪廓を暗示してゐることなのである。

それならば、登山は一つの思想であらうか。否、否。かのコーリー教授の言葉にもある如く、登山は決して思索冥想のみに依つてなすことは出来ない。必然的に、實際的な登高の形を経て、登山はなされるものだからである。若し登山を單なる一つの思索とみるならば、恐らく私達はあらゆる自然觀照家をも登山家と呼ばなければならぬであらう。西行や芭蕉が登山家でないことは明かである。そしてまた單なる自然彷徨者も、彼が何らかの形に於て登行をなさざる限り、明確に登山家と區別さるべきであらう。

以上に於て私は、山登りの本質を輪廓的に叙べ來つたのであるが、更に、一つの比喩的な言葉をもつて、より明かにその本質を描き出すことが出来ると思ふ。いま假りに、藝術の世界を夜とし、スポーツの世界を晝とするならば、山登りの世界は、この夜と晝を繼ぐ朝であり、晝の世界から夜の世界に跨る夕暮の世界であるといふことが出来る。晝は飽くまでも活動の時であり、夜はあくまでも沈靜の時である。更にまた晝の世界が悟性と有限と實際と經驗の世界であり、夜の世界が心情と無限と神秘と體驗の世界であるならば、スポーツの世界はたしかに晝であり、藝術の世界は夜といふことが出来る。そして山登りの世界は、この晝と夜の世界の中間にあり、一面は晝の世界に在ると同時に、他の一面は夜の世界につながるものである。即ちスポーツのの方面は前者であり、思索的の方面は後者である。それ故に、山登りは、行爲の世界であると同時に、またそこには反省や懷疑も存在し得る所以である。若し全く思索的な方面を棄てて、スポーツ的な方面にのみ趨つた場合は、かのフランツ・ニーベルの指摘したやうな、唯單なる岩登りそれ自身を享樂の目的とする岩登りや、或はスキーの享樂のみ全体的な目的とするスキーイングなる、登山そのものとは離れた別のスポーツになるので

あり、又もしそのスポーツ的な方面を全然棄てて了ふならば、登山と全く異なる思想のみの世界に移り變るものである。この兩極端に趨つた場合、それは最早已に登山と呼ぶことは出来ないものである。言ひ換へるならば、登山家とは、常に山に對する愛——コーリーの所謂節度ある徳に根ざす愛を失はないものであり、その山に對する愛をば、また絶えず登高精神に依つて芳高く潤してゐるものであり、同時に山に對する詩的感情とそれに依つて導かれる思索の世界に棲むことの出来るものでなければならぬ。この意味に於て、登山家は、必ず詩的情想をもつものなのである。そして、そのやうな思索的な一面をもつといふ意味に於ては、山登りは實に一つの思想であり、スポーツ的な精神に出發するといふ意味に於ては、山登りも亦一つのスポーツである。そして山登りが、本質的にこの二つの面よりなるといふところに、既に登山家たるべきものの本質的な約束が先在するのである。如何に彼がスポーツを愛し、スポーツ的精神に燃えてゐようとも、實際に彼が蒼空の下にあつてスポーツすることをしてしなば、彼は決してスポーツマンと呼ぶことは出来ない。如何に彼が精神に於て藝術的であり、生活に於て詩的であらうとも、何らかの形に於て藝術創造を營まない限り、彼は藝術家と呼ぶことは出来ない。これに均しく登山家も亦、山登りするものでなければならぬ。そしてこの山登りとは、それらの二つの面を正しくもつものを意味してゐる。然しながら何れの世界にあつても道は遠い、——まことに正しき姿相すがたに於て山登りすることが出来るまでには、一つの長い道が私達の行手に在る。そして、恐らくは時間的にも精神的にもたゆまざる忍耐と精進とのみが、そこにまで私達を導くであらう。そして遂に私達が登らうとする山は、單なる有形の有限の山であらうか。それともまた、無形の無限に高き山であらうか。とまれ、山登りは、登山家にとつては何者にも換へ難き生活であり、精神的な創造でもあるのである。

(一九二八・十・十五稿)

## スキー材とワツクスと雪質(溫度)に就て

中 村 新 一 郎

スキー競技者の最も必要とするは一にそのスピードである。ジャムプにせよ、デイスタンスレースにせよ。

而してそのスピードはスキー材とワツクスと雪質に關係する事の偉大なる事は勿論言を待たざる事である。

猛烈なるスピードを必要とするジャムプ競技に於ては勿論であるが、長距離を滑走するデイスタンスレースにあつては特にスキー材と、ワツクスと、雪質によりて勝負を決せられると云ふても過言ではなからう。

此の種の關係に就ては吾國にても、夙とに幾人かのレーサーにより深く研究せられては居る事であらうが、然し、かゝる廣範圍に渡る研究に就ては單獨にては勿論、又短期間の間に充分なる仕事はなされ得ないであらふ。

吾が北海道内にも、各地各所に依り氣温と雪質とは互に相異つて居るのである。まして吾が日本國內に於ては南國より北國に移るに従つてその土地の氣温に差異あり、従つてその雪質に及ぼす影響は又至大にして、唯一ヶ所に於て充分にシーズン中を通じての雪質の變化に對するスキー材及びワツクスの關係を研究し得たとしても、それは各地各所の氣温、雪質に對して、完全に適合するか否かは分らぬ事である。

次の事實は例とするには餘りにフェールシヤフトなものであるが。

一九二七年十二月青山温泉に於ける練習と、同年十二月札幌に於ける練習と一九二八年一月十勝に於ける練習にし

て略々同温度の際に同じスキー材を用ひし結果を見るに、

(I) 1927年12月 (青山温泉にての練習)

(a) 2.8km (約) 12/27' (1新平均4'27'')—7°C(温度)

同 11/42' (1新平均4'11'') 〃

(b) 12km (約) 55'30' (1新平均4'37'')—5°C乃至—7°C

(a)の場合に用ひしワツクスはミツクス、サライツクスNo.6

(b)の場合に用ひしワツクスはサライツクスNo.6、メデュー

ア

(II) 1927年12月 (札幌にて)

2km (約) 9'27' (1新平均4'43'')—6°C

ワツクスはメデューAを使用す。

(III) 1928年1月 (十勝に於て)

10km (一周一哩の競馬場を一周)

1'50' (1新平均6'52'')—6°C

ワツクスはメデューAを薄く塗る。

(I)(II)(III)の各々は略々平坦なるコースで、スキー材は何れも

ワツクスを用ふ。

上例に於て(I)と(II)の雪質は略々同様で多少濕氣を有する

粉雪にして(III)の場合の雪質は細き結晶質のガラメ様の雪で

あつて水分は殆んど全く含まれなかつた。

「尙雪質の微細な變化(差異)に對しては、その人が現に体験せる以外に言葉又は筆にては完全に言ひ表はし得る

ものではないのである。」

以上の例に於て(I)(II)(III)の各々の場合に氣温は略々類似(正確に觀測する時は尙多少の差異はあるであらふ)するもその雪質に就ては(I)(II)略々類似(III)とは全く異つて居るのである、それ故に同じクルミ材のスキーを用ひ又類似のワツクスを使用しても、その雪質によりその滑走スピードは大いに異つて來たのであつた。

實に雪質はその時の氣温に依りてのみ支配せられるものではなく、風の作用に依り或は又大氣中の濕度等に依りて支配せられるものであらふ。

例ば0°Cの氣温に於ける高田、大鰐地方に於ける雪質と同温度に於ける北海道及び樺太地方の雪質とは何れも少なからぬ相違があるであらふ。又0°Cに於てとなくとも-5°Cの氣温に於ても又何れの氣温に於ても各々土地の異なるにつれて雪質は異つて來るのである。

それ故に之の種の研究の如きは日本各地のスキーヤーに依つて研究され、各地に於ける經驗又は研究の結果を一日も早く發表せられる事を欲するのである。

之の種の研究の重大なる事は尙多くのスキーヤーに依つ

と感ぜられる事であらうが自分にして特にこのスキー材とワックスと雪質に就ての關係の重大なるを切に感ぜられたる動機は一九二七年及び一九二八年十勝に於ける歸省中の平地滑走の練習に於てである。

### スキー材と雪質に就て

前の例にて見る如くに、略々類似せるワックスを使用し又同一スキーを使用しても、雪質の異なるにつれて、その滑走速度は大いに異つて來るのである。即ち雪質とスキー材との間には大なる關係のある事を知るのである。

次に一九二七年及び一九二八年に於ける練習の成績を示して雪質とスキーとの關係に就て見るに

#### (十勝に於ける平地滑走練習)

1927年 17km 樺材 (薄)  $1'32.27''$  温度 $-7^{\circ}\text{C}$  →  $-15^{\circ}\text{C}$   
 10km 樺材 "  $49'59''$  "

雪質は結晶質の軟雪(ゼート糖の如き細結晶雪)水分は殆んどなし。

#### (十勝に於ける平地滑走練習)

1928年 10km クルミ材 (薄)  $1'50''$  温度 $-6^{\circ}\text{C}$  →  $-12^{\circ}\text{C}$   
 3.2km クルミ材 (薄)  $22'20''$  "

1.0km クルミ材 "  $11'15''$  "  
 雪質はザラメ様の細かき結晶質の雪水分は殆んど含まれず。

尙又

1927年(札幌に於ける平地滑走の練習にて)

10km クルミ材  $1'46.30''$  温度 $-3^{\circ}\text{C}$

以上の結果を一籽の平均タイムに換算すると

1927年(十勝に於て)

17km 1kmに當り  $5'26''$

10km "  $4'56''$

1927年(札幌にて)

10km 1kmに當り  $4'39''$

1928年(十勝にて(1))

10km 1kmに當り  $6'52''$

3.2km "  $6'59''$

1.0km "  $7'02''$

以上の結果を見るに体のコンディションの如きは何れも略々同様であつた。而して技術は一年を経過せる一九二八年に於ては恐らく前年よりは多少の進歩があつたものと見なければならぬ。

然るにクルミ材とカバ材のスキーを用ひしも雪質によつて一九二七年と一九二八年の十七籽と十六籽にては一籽平

均一分二十六秒の差を生じ、又一九二七年の札幌に於ける  
一〇籽と一九二八年の十六籽とにては一籽平均  $2\frac{1}{2}$  秒も  
の差を生じて居るのである。又一九二七年の十籽（札幌に  
於ける）と同じく十勝に於ての十籽とにては一籽平均  $2\frac{1}{2}$  秒  
の差に過ぎないのである。

これによつて見るに、勿論ワックスにも關係する所ある  
も此處にスキー材と雪質との關係の滑走スピードに及ぼす  
影響の大なるを略々知る事を得るのである。斯の如き事は  
實にその雪質に對するスキー材の、適、不適の極端なる場  
合であつたかも知れないが、如何にその雪質に對してスキ  
ー材の使用法の誤りにより努力を徒費し、少なからざる  
時間を空費し、尙その上に不快なる感を抱いたかを知るの  
である。

單なる二、三回の經驗により、極めて不確實なるもの  
はあるが大體に於て、

比較的低温度の際の水分含有量の少なき雪質に對して  
は樺材スキーのクルミ材スキーに優れる事を知り又比  
較的多少水分を含有する温暖なる場合の雪質に對して  
はクルミ材スキーの適する事を知つたのである。

尙以上の場合に各種のワックスに對して試験を行つたな  
ら又スキー材と雪質（温度）とワックスの三者間の微妙な  
る關係を知り得たであらふ。

次に今までの經驗によりて得たるスキー材の略々如何な  
る温度に對して適するかを記すると、

櫻（エゾヤマザクラ）  $+3^{\circ}\text{C}$  附近より  $-10^{\circ}\text{C}$  附近まで

ヒツコリー 略々同じ

イタヤ 略々サクラ材と同じであるが前者に比して稍

吸濕性に富む故に水分を多量に含む雪には適  
せざるべし。

カンバ  $-7^{\circ}\text{C}$  附近以下にして濕氣含有量の少き雪質に對

して適し温度下降するにつれて、その滑走速  
度増すものゝ如し。

クルミ  $-6^{\circ}\text{C}$  附近以上にして多少水分を含む雪質に對し  
て適するものゝ如し。

アサダ 略櫻及びイタヤに類似す。

尙スキー材として、エンヂ、青ダモ、ケヤキ、カシ、カ  
タスギ、シウリ、ナラ、アカシヤ等あるも確たる事を経験  
せず。

之等大体記載せるスキー材は略々如何なる温度の雪に對して適するかを示したのみで、勿論日本各地に於てそれ等の温度の雪に對して以上のスキー材が適すると云ふのでは無いのであつて、之等は唯自分が札幌附近の雪に就て經驗せる結果に過ぎないのである。

### スキー材とワツクスに就て

先づスキー材とワツクスに就て經驗せる二、三を例として記するに、

2km (平地) クルミ材	{	チンセツ	(Grund)	9'27"
		ステューム	(薄く)	
2km (山) イタヤ材	{	チンセツ	(Grund)	9'27"
		クリスチル	(7)	
		ステューム	(3)	

温度は $6^{\circ}\text{C}$ にしてコースは多少勾配あり、略々同時刻に於て行ふ。

兩者を比較するに所要タイムは同じであるが後者にあつて前者より滑りは良きも後滑りを感じた。即ち前者は *stemmen* が比較的良好であるため後者と同一時間にて、 $2\text{km}$  を滑走し得たのである。この際相當の急斜面で之の試験を行ふたなら恐らく前者は後者より短時間にて所要距離を滑走し得た事と思はれる。又この際に後者にあつて *sliden*

をその儘として *stemmen* を前者同様に利かす事を得たなら、更に良好なる結果を示した事であらう。同様に、前者をして *stemmen* をその儘或はそれ以上とし *sliden* を後者以上に利かす事を得たなら更に遙かに良好なる結果を得た事であらう。

この際何れのスキー材を以て可とするかは、一言の下に斷定する事は不可能である、何れのスキー材も之の時の氣温の雪質に對しては適するものである。かゝる場合には各々のスキー材に對して如何なるワツクスを使用するか問題になるのである。唯之の結果よりして何れのスキー材をかゝる状態の場合に用ひたら利益あるやと云ふと使用者の体力又は登行及滑降の技術の如何により、体力に優れるものにあつては前者を使用するを可とし、又技術に優れる者にあつては後者を使用するを可とするであらう。遺憾ながらかゝる雪質に何れの材と、何れのワツクスが利益あるかを完全に試験し得なかつたのである。尚かゝる事に對しては多くのレーサーと共に今後益々研究を續けん積りである。

スキー材、クルミ、温度 $1^{\circ}\text{C}$  相當多量の水分を含有する

雪質。

I クリスチルを相當薄く塗る

II ステュームを厚く塗る

I の場合には steilen は猛烈に良かったが stemmen は全然利かなかつた。

II の場合には stemmen steilen 共に相當よく利いた。

かくの如く比較的温き温度の雪に適するクルミ材を用ひてもワックス又はその塗り方によつて大いに差異を生ずるのである。

尙又距離約一籽の斜面に於ける一例を挙げると、

I	イタヤ材	ステューム (dünn)	上) 7°08'	—3°c
			下) 2°52'	"
II	カラ材	ワックス (dünn)	上) 6°46'	—7°c
			下) 2°15'	"

上例に於てIIを比較するに

I 登降二籽に於て十分

II は登降二籽に於て九分〇一秒

II の場合は相當良好なる結果である。

之の場合用ひしスキー材及びワックスを共に夫々の温度

に於ける雪質に對して適當なるものとしたなら結果は略々類似するものでなければならぬ。事實<sup>3)</sup>の札幌附近に於ける雪質に對してイタヤ材を用ひメデュームを使用する事は適當なるものにして又<sup>7)</sup>の札幌附近に於ける雪質に對してサクラ材を用ひワックスを使用する事は是亦不適當なるものではないのである。勿論何れの場合にも之の外に適するスキー材及びワックスはあるにしても之の兩者の場合に於てIに於て塗蠟法に尙注意をしたらどうであつたらう更にワックスを rechte mitte 及び dick に塗つたらどうであつたらう。遺憾ながら是亦徹底的なる研究をなし得なかつたのである。

更にIIの場合に於ても各種の度合に塗蠟したら或は之の場合より良結果を得たかも知れないのである。

### 雪質とワックス及びその塗蠟法に就て

以上の例は全く拙劣なる例に過ぎないが雪質(温度)の異ると共に又スキー材も異つて來るのである。同様に更に雪質(温度)の異なるにつれて、ワックスも亦異つて夫々、適、不適が生じて來るのである。

短距離のレースの際は出發してよりゴールに歸る迄の間

に雪質の變化は比較的少いが長距離になるにつれて滑走時  
間も長くなり従つてその間に雪質(温度)の變化も大になる  
のである、それ故にレースを始める前にあつては特に雪質  
(温度)の變化に對して大いに考慮してスキー材の選定及び  
塗蠟に十分の注意を拂ふべきである。

今ある温度の雪に對して適當なるスキー材とワックスを  
選んだとしても更にそのワックスの塗り方如何に依つては  
同一ワックスを使用してもその *gleiten* 及び *stemmen* の  
度合は大いに異つて來るのである。例へばレースの際に當  
りスキー材の選定が決定して又それに適するA及びBのワ  
ックスがあるとするとその塗蠟法としては、大略。

A. なるワックス	{	1. dünn
		2. rechte mitte
		3. dick
B.	}	1. dünn
		2. rechte mitte
		3. dick

又更に二種のワックスを同時に使用する場合には、Aな  
るワックスを先に、次にBなるワックスを塗る。或は又之  
を反對に、Bを先にAを後に、時には又同時に相混じてA  
Bを用ふる事もある。

I A <sup>(a)</sup> B <sup>(b)</sup>	{	1. dünn
		2. rechte mitte
		3. dick
II A <sup>(a)</sup> B <sup>(b)</sup>	{	1. dünn
		2. rechte mitte
		3. dick
III A <sup>(a)</sup> B <sup>(b)</sup>	{	1. dünn
		2. rechte mitte
		3. dick

(3)(5)(7) は各々のワックスの混合割合

上例の如く一種のワックスを使用するに當りてもその塗  
蠟法には大略三通り或はそれ以上となる。更に二種のワッ  
クスを使用するに當りては十二通り或はそれ以上になる長  
距離レースの際に二種のワックス又はそれ以上のワックス  
を使用する際には更にその塗蠟量及び割合に就て注意をし  
なければならぬのである。

次に大略ではあるが札幌附近に於ける各種の温度の雪質  
に對する略々適當なるスキー材とワックスを記すると、

I 0°C 以上

(a) 粘鼠質(ツラメ線)の雪質に對しては

スキー材=カールキ、ヒツコラー、チカラ、イタヤ、カマ

ス、ツサダ。

ワツクス=クリステル、スカーラムメルニツゾ。

(b) 濕氣を相當に含有する粘性強き雪に對しては

スキー材=クルミ、ヒツコリー、サクラ、イタヤ。

ワツクス=クリステル、ゾーム。

## II 0°C 附近

(c) 結晶質の雪に對しては、

スキー材=(a)の場合と略々同様。

ワツクス=クリステル、メヂューム。

(d) 多少濕氣を有する粉雪に對しては

スキー材=(b)の場合と略々同様。

ワツクス=クリステル、メヂューム、ゾーム。

## III 0°C 附近以下-7°C附近まで

(e) 結晶質の雪に對しては

スキー材=クルミ(温度下降するにつれ悪くなる)、

サクラ、イタヤ、アサダ、カネバ(温度下降す  
るにつれ良くなる)。

ワツクス、クリステル、メヂューム、ゾーム、ミツクス

(f) 粉雪に對しては

スキー材、クルミ、サクラ、ヒツユリー、イタヤ、アサダ

ワツクス、メヂューム、ミツクス、ゾーム。

## III -7°C 以下の雪に對しては

(g) 一般に粉雪に對しては

スキー材、サクラ、イタヤ、ヒツユリー、アサダカネバ

ワツクス、メヂューム(-7°C附近のみ)ミツクス、ゾーム

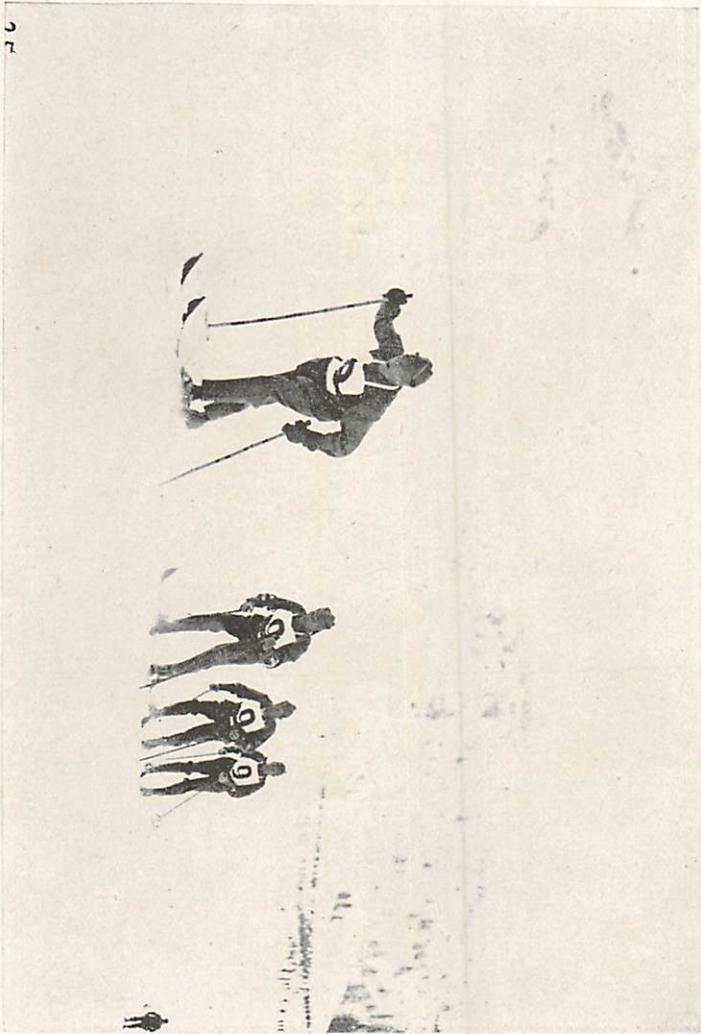
尙近年に到りて實に多くの外國製各種ワツクスを見るに  
到つたが何れのワツクスが何れの状態に最も適するかは未  
だ自分は之のワツクスは之の状態の時に最も適當であると  
斷言し得る自信無きにより、記載する事は止めたい。尙以  
上述べたワツクス及びスキー材も大体記載せられた温度の  
雪質の場合に適當なるものではあるが、その塗蠟法並びに  
數種のワツクスを相混じて用ふる際の割合の如きは各自そ  
の時々に従つて研究され、正確なる結果を發表せられる事  
を欲するのである。

次に不完全ながら何等かの参考までに、昨年及び今年中  
に使用したる、スキー材と、ワツクスと又雪質(温度)とに  
就ての結果の大略を表記すると。

スキー村	雪	質	温度	ク	ツ	ク	ス	結	果
ク	ル	ミ	水分を多量に含むサラメ雪	+10°C(3月下旬)	クリスデル	(rechte mitte)	schlecht	gletten	stemen
サ	ク	ウ	水分を相當に含む降雪後の雪	+3°C	ツクス、メテューム	〃	schlecht	〃	etwas gut
サ	ク	ウ	濕氣ある粉雪	+1.5°C	メテューム	〃	etwas schlecht	〃	〃
サ	ク	ウ	降雨後の雪にて水分を多量に含む	〃	クリステル	(dick)	etwas gut	schlecht	schlecht
サ	ク	ウ	降雪中の雪	0°	メテューム	(rechte mitte)	etwas schlecht	〃	(底面に凍り付く)
サ	ク	ウ	凍雪上に約2cm位の新雪	0°C	メテューム	(dick)	schlecht	〃	〃
サ	ク	ウ	濕雪	0°	メテューム	(dick)	etwas schlecht	ganz gut	ganz gut
サ	ク	ウ	濕氣を有する粉雪	-0.5°	メテューム	(dünn)	etwas gut	ganz gut	ganz gut
ク	ル	ミ	凍雪(四所に吹雪によつて粉雪が入つてゐる)	-1°	スカークラスメルニツグ	(rechte mitte)	ganz gut	schlecht	schlecht
イ	ク	ヤ	凍雪上に約5cmの新雪	-1°	メテューム	(rechte mitte)	etwas schlecht	gut	gut
ク	ル	ミ	粉雪(吹雪)	-1°	左テラトリー	(dünn)	ganz gut.	〃	〃
					右メテューム				
					更にクリステル(7)メテューム(3)				
					(rechte mitte) (7)(3)は混合割合				
					クリステル (dünn)		gut	schlecht	schlecht
サ	ク	ラ	凍雪上に約6cmの新雪	-1°	メテューム	(dünn)	etwas gut	ganz gut	ganz gut
ク	ル	ミ	濕氣を有する粉雪	〃	メテューム	((rechte mitte)	ganz gut	〃	〃
ク	ル	ミ	多量に水分を含む粉雪(濕雪)	〃	クリステル	(dünn)	gut	etwas gut	ganz gut
サ	ク	ウ	粉雪なるも少々水分を含む	〃	メテューム	(dünn)	etwas gut	ganz gut	ganz gut
サ	ク	ウ	多少水分を含む粉雪	-1.5°	メテューム	(dünn)	ganz schlecht	〃	〃
イ	ク	ヤ	凍雪上に僅かの新雪	-2°	クリステル	(dünn)	ganz gut	〃	〃
サ	ク	ウ	微細なる結晶質のサラメ雪多少水分を含む	-2°	メテューム	(dünn)	ganz gut	〃	〃
ク	ル	ミ	粉雪(濕氣は極少)	-3°	メテューム	(dünn)	gut	〃	〃
サ	ク	ウ	粉雪(多量に水分を含む雪)	〃	メテューム	(rechte mitte)	gut	etwas schlecht	etwas schlecht
					蓋り方が一様ならざるため雪のつきすぎたる所があつた				

サ	ク	ラ	粉	雪	〃	ミツク	ス	(dünn)	gut	etwas schrecht	15
サ	ク	ラ	粉雪	(水分極少)	-4°乃至-6°	メテユーム	ム	(dünn)	schrecht	ganz gut	
ク	ル	ミ	濕氣少なき粉雪		-4°	メテユーム	ム	(少量)	gut	schrecht	
サ	ク	ラ	降雪中の雪		-5°	サライシウス	ス	No7(dünn)	etwas schrecht	gut	
ク	ル	ミ	新雪		-5°乃至-7°	サライシウス	ス	No6(dünn)	gut	gut	
サ	ク	ラ	〃		〃	メテユーム	ム	(dünn)	gut	〃	
カ	ベ	ス	〃		〃	エペネーツ	ツ	(grund)	etwas schrecht	〃	
サ	ク	ラ	〃		〃	メテユーム	ム	(dünn)	gut	schrecht	
サ	ク	ラ	〃		〃	メテユーム	ム	(grund)	gut	schrecht	
サ	ク	ラ	〃		〃	メテユーム	ム	(dicke)	gut	ganz gut	
サ	ク	ラ	粉雪	(吹雪)	-6°	メテユーム	ム	(dünn)	ganz schrecht.	ganz gut	
サ	ク	ラ	〃		〃	メテユーム	ム	(少量)	schrecht	〃	
サ	ク	ラ	凍雪上に約15cmの新雪		〃	サライシウス	ス	No7(dünn)	schrecht	〃	
ク	ル	ミ	粉雪	(極めて僅か、濕氣を含む)	〃	メテユーム	ム	(dünn)	schrecht	etwas gut	
イ	ヌ	ヤ	〃		〃	ナレーン	ン	(grund)	etwas gut	schrecht	
ク	ル	ミ	乾雪	(サライス様の細かき結晶質の雪、水分皆無)	〃	メテユーム	ム	(dünn)	gut	schrecht	
ク	ル	ミ	粉雪	(吹雪)	-7°	サライシウス	ス	No6(dünn)	etwas gut	〃	
ク	ル	ミ	乾雪	(サライス様の細かき結晶)	-8°乃至-12°	メテユーム	ム	(dünn)	ganz schrecht	〃	
ク	ル	ミ	粉雪	(吹雪)	-9°	エペネーツ	ツ	(grund)	etwas schrecht	〃	
						サライシウス	ス	No6(dünn)	ganz schrecht	〃	
						メテユーム	ム	(dünn)	ganz schrecht	〃	





## ロツグケビン及びカツテーヂ

### 其の建築法、造作、飾付及び家具の造方（承前）

伊 東 虎 夫 譯

根太——小桁或ひは根太と稱し末端に柄を造り、「受け」を刻まれた友材に嵌込まれるのである。此の柄は短くて充分である。第一階の床を支持する根太は見えぬが故荒木の儘にても差支へはない、然し二階の床根太及び天井の小桁は樹皮を剥いだものであれば最上である。是等の根太及び小桁にして斧または鉋にて荒く刻目を附した角材仕上げは、往々優れたる効果を揚げる事がある。

小桁には眞直にして堅牢な材を選択する事である。梁間十二尺用丸太なれば少くも直径六寸を要し、梁間十六尺なれば直径八寸、而して廿尺なる時は九寸乃至一尺以上あらねばならぬ。是等の小桁の上面は末端より末端迄床板を張

渡すが爲に平滑にせられねばならぬ。然し乍ら其の面は中央部に於て約一寸五分位中高に鉋掛けをせられねばならぬ而して徐々に兩端に向つて低めてゆくのである。こは小桁が渡され床板が張られたる時、小桁はその自重及び床板の重さに依つて中央は自然たわむであらう、故に床面を常に水平に保たしめる爲に斯くするのである。

小桁、荒削の木材は廣齒の斧を以つて研る熟練した大工なれば是等の道具にて優に一日仕事でやつて仕舞ふであらう。小桁の間隔は二尺乃至三尺位にて、小桁材の太さ及び其の力に依つて異なるのである。友材の受けは丸太の上側面に刻み而して柄は小桁の兩端に造らるるのである。（第七圖

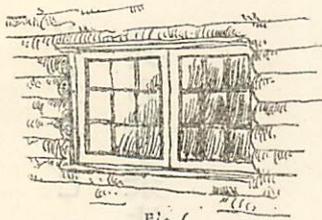


Fig. 6.



Fig. 9.

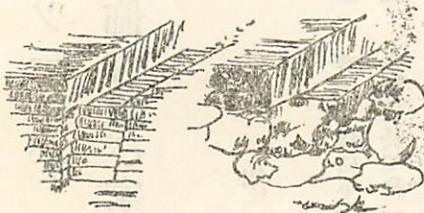


Fig. 10.

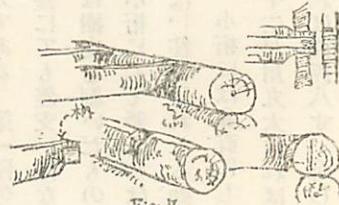


Fig. 7.

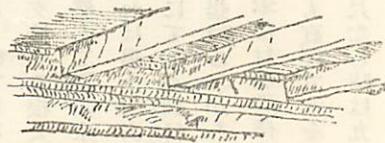


Fig. 8.

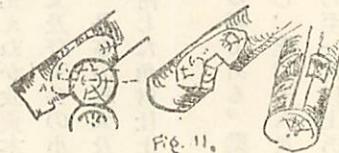


Fig. 11.

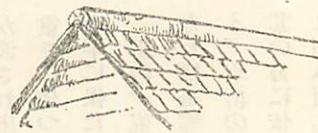


Fig. 12.

小桁を友材の柄に嵌込みたるうへ  
 釘付して定着せしむ。各間仕切の下  
 方に當る個所には小桁と同方向に良  
 質の硬材を直接に横へねばならぬ、  
 たとへ天井下の小桁の間隔を不規則  
 にして外觀を損じて止むを得ない  
 階段、煙筒、落し戸及び昇降口等  
 の如き床上に設けらるゝ場所の爲、  
 若し小桁の間隔が餘りに狭隘なる時  
 は、小桁は切られ而して渡木を小桁  
 間に圖の如く釘付し、切斷せられし  
 小桁は此の渡木に釘付にて交互に支  
 持せられねばならぬ。  
 木部と煙筒との間には多少の空間  
 を遺す必要がある、如何なる場合に  
 も煙筒の上部に木材の末端が接觸す  
 ることを嚴禁する。小桁を受くる爲  
 に煉瓦又は石材の持出若しくは棚が  
 造られて在るにあらざれば危険であ

る。(第十圖を見よ。)若し木材部が餘りに煙道に接近してある時は、自然燻り終ひには火を呼ぶに至るであらう。

屋根——屋根の勾配は建物の幅と角度の迫高との間に存する割合である。三分の一勾配とは即ち幅員の每三尺ごとに迫高は一尺となす。勾配は大体に於て一部は設計者の趣味にも依るが、被覆材料の性質に依つて決定せらるゝのである。急勾配の屋根は最上である、雨を流し雪を滑落せしめ風も屋根板の下迄雨雪を吹込みはせぬであらふ。又屋根板を剥ぎ飛ばすが如き事は容易には出来ぬであらふ。然し乍ら急勾配の屋根は經費を要する、何故なれば大きく又長ければ夫丈多量に木材及び被覆物を要するのである。

桷たかを選択し小桁と同方法に依つて平滑にし下端は側面丸太積の最高部とを第十一圖に示すが如く咬み合せ屋根の勾配に合ふやうにするのである。

頂部に棟木を横たへ、それに桷を兩側より寄せ掛ける。先づ最初に桁風桷を取付け、然る後他の桷を並べ置けば容易で、又正確に取付くる事を得。是等が手際善く造られざる時は、棟木に合はして介在する桷を少しく砍るとか乃至塞ぐとかせねばならぬ事になるであらう。斯くして完全に

平らに屋根を張る事が出来るのである。此の桷は二尺乃至三尺置きに取付ける、木釘又は鐵釘にて側壁に一定せしめ而して頂部も同じく釘付になすのである。

普通の柿板かきい葺き屋根には折板へりの二寸に四寸位の小割板が宜しく、柿板の水垂に適するやう二寸離れに置く、小片材が得られざる時は四、五寸位にても宜しく、一方を平らになし小桁の上に半々に重ね打付けゆくののである。小桁は必要以上に決して斫る可からず、何故なれば冬季の重い積雪に良く耐へねばならぬ故である。是等の小割板はよく正しく釘付にせられねばならぬ。

切妻の端を出来るだけ突出させる爲、受木或は板の何れにしても、其處へ使用するものは六寸以上にせねば、雨垂れを避けることは出来ないであらふ。

屋根は其の地方に依つて各々異りたる材料を用ひられ、容易に得らるゝ材料を用ひても手際如何によつては巧みに葺かれるであらふ、柿板葺き屋根の勾配は四分の一乃至二分の一迄にて、時には二分の一位上の事もあれど、然し乍ら四分の一以下であつてはならぬ。柿板は専門的に謂ふときは幅四寸であるが、實際に造られて居る物は大いに異つ

て居る。普通千枚一束にて販賣せられる。柿板の長さも亦大いに異つてゐる、然し少くも善き屋根用としては一尺六寸位である可きである。

柿板材としては柔かい樹が善く、杉、樅、松及び落葉松等は最上である。柿板製造家は地上に丸太の小株を置き、それを薄く割いて片材を造る。無駄をせず水垂五寸として置き並べるならば、千枚の柿板はよく百卅平方尺の面積を被覆するであらふ。最初の即ち擔端の並びは普通二重に柿葺きとす、然る時は氷雪に依り破壊さるゝが如き事はない。柿葺きの最終の列たる屋根の最高部は棟桁にて完全に被覆せられねばならぬ。これは直徑四寸乃至六寸位の小丸太を其の屋根の勾配に合わせてV字型に砍り割きたるものを棟木とするを最も完全とする。善く葺かれた柿葺屋根は十五年程の平均耐久力を保つものである。

柿板——切妻即ち小屋の全たき側面は箱盖板又は通常の板を以つて垂直の小柱に釘付になし閉鎖するも宜ろし。是等の小柱は一尺五寸置きに頂端をプレート釘に依つて確保されてあらねばならぬ。次に板は屋根に於けると同様柿板を以つて覆はれねばならぬ、此の際ビルディング、ペー

パーにて裡打をなし置く時は冬季室内の温度を保つに善いであらふ。荒削りの角材或は丸太の角柱を立て、内部に於て夫等と同高の間柱を設置して之れに柿板葺きの外觀造りは中々面白い効果を擧げる事があるものである。これでは直立丸太の角隅があるに過ぎない。第二階上は背板又は半丸太材にて打付けられる（間仕切の真にて記述するであらふ）も善い、然し乍ら通常の丸太積みの方は最上であつて、丸太が切妻にて屋根の頂部迄水平に積重ねられたるを見るは感じの善いものである。

樹皮被覆——樹皮は樹液がある間は容易に剥ぐことが出来る。樵人は樹木の周囲を四尺乃至六尺置きに簡單にきざみ傷を付け、而して次ぎに縦にきざみ傷を付けて、以前に附した輪傷を結び、徐々に樹皮をこち離しゆけば終ひには樹皮の筒を全く幹より取外す事が出来るであらふ。巨樹より切離したる樹皮は最上である。何故なれば樹皮を平板になす場合倭樹より取りたるものは割け又破れ易ひのである。剥ぎ取りたる樹皮は數日間地上に積上げ置く、然る後木石の重量にて平になす。乾燥後適當の大きさに切り柿板として使用するのである。樹より切離されたる儘の大きさにて

葺くを普通とする。

屋根が是等の長い樹皮にて覆はれる場合には、小桁は二尺置きに水平に設けられねばならぬ。樹皮は六寸位の重なりにて横たへらるゝのである(第十三圖)。此の屋根は一時的遮蔽として非常に好適である。

茅葺——茅葺屋根は必要上その勾配は峻しく四十五度位の角度にて建られねばならぬ、茅は太ければ雨水の流れよく反對に細ければそれだけ水ぎれは悪いであらふ。

檼は通常の屋根に對してと同様に置かれねばならぬ、若し茅が括り付けらるゝ木摺り打が小さく又累弱なる時は、檼は詰合せて置かれねばならぬ。木摺り打に用ふる小切は直徑八、九分位の丸棒にて作らる可く、而して檼に對して七寸置きに直角にまた水平に配置されねばならぬ。板材より挽き割られた小割板も丸棒の代用となるも、それは弱くまた耐久力がない。

藁を葺く前によく水に浸し眞直にしなければならぬ。斯くすれば藁は皆一方にねるであらふ。先づ檐より始める、厚さ四寸巾一尺位の束になし、最初の小切の列に棕櫚繩またはタール漬にした細紐にて締付け、からけてゆくのである。

此の細紐は大針に通し藁束の上部を挿通し、木摺にかちけて結ぶ、此處は次ぎの列の束にて被覆せられて仕舞ふであらふ。屋脊下の兩側の各小切は柿板葺きに於けるが如く、よし夫れが接合部にて露出した藁の場所が多くとも重ね掛くる様に造られるのである。小切が檐より屋脊迄置かれたる時、木製の熊手を以つて藁葺きを良く梳り刷くのである。檐端の藁を眞直に又角がりになす、同方法にて屋脊まで降棟を整頓してゆく。檐板または棟棒は最後の列の茅葺き仕事をなす爲に梯子を寄掛け、人が乗るもよく夫れに耐へられ得る丈の強さがなければならぬ。

茅葺屋根はすべてのものに立優つて風雅なものである(第十四圖)然しその構造には非常に骨を要する點が少なからずある。素人には手落なく葺くと謂ふことは仲々困難な仕事である。然しまた完全に、巧みに造られたるものは廿年或はそれ以上に壽命を保つことがある。

床——今や小屋は屋根を頂くことになつて大分態をなして來た。次ぎには床と謂ふ事項に付き記述する。床板には箱差にせられ、片面仕上げの厚さ一寸巾五寸位の樅又は松

板が上等である。まれには五寸以上の板も使用せらる。然し注意せざる時は乾燥に依る板の收縮の爲に空氣の流通も善くなる代り、砂、ほこりも浸入して來るであらふ。平滑な天井を造るには床板は兩面鉋仕上げにせねばならぬは勿論の事であらふ、或は二重張りにせねばならぬ、最初の下張り板は下面を鉋り、斜に張るのである。床板を購入するに當つては所用の正しき寸法に依つて求め、同時に質の固く堅牢なる物を選ぶ、斯くすればキャンブに到着後何等の面倒も無駄もなく直ちに仕事に着手することが出来るのである。

屋内の劃壁——劃壁(間仕切)には種々なる方法がある、是等はすべて床板が張渡されたる後に造作せらるゝのである。最も簡單にして而して怖らくは最も工合の善い方法は箱差にした板をもつて劃壁を造ることである、若し特別に平滑にして小清麗なる仕事を望むならば、製材所にて豫め兩面を削り置くを要す。

角を取去つた一寸角位の棧を天井或は梁の頂部及び下部は床面に釘付にせねばならぬ、但し位置を誤つことなく天地共に一致せねばならぬ。箱差板を適當の長さに鋸き而し

て嵌込み棧にて押へ釘付になす。これにて間仕切は完成したのである。斯くして間仕切が造られたる時、板の皺縮に依る龜裂は後々小切れを嵌込み閉ざす事が出来るであらふ

第二の方法——鉋掛板または荒板を用ひ、合せ目は貫にて當て釘付になす。(第十六圖)此の場合板は頂部底部共に嚴重に釘付にせねばならぬ。

第三の方法——背板を使用する(第十七圖)この背板は通常製材所にあつては燃料として賣却され又は消費せられて居るのである。これを交互に垂直に立竝べ天地兩部に於て釘付になす。此の背板を得ることが不可能であるなれば代用物として丸太を割きたるものを脊板と同様に用ひれば善い、こは堅牢で又外見も良いであらふ。唯困難なるは丸太を割くことであらふ。斷出しの勞働者には如何にして取掛つたものか手出しの仕様もなく、至難の技として殆んど行はれてゐぬ。然し乍ら實際は想像せられ居る程の難事ではない。割かむとする丸太を先づ鋸架に寄掛ける。鋸架は高さ三尺位にて、丸太の長短に従つて適當に配置せねばならぬ、然る上末端より他端へチョークにて線を引き、大なる梓鋸或ひは重く巾廣の鋸(木挽鋸)を以つて二等分する。

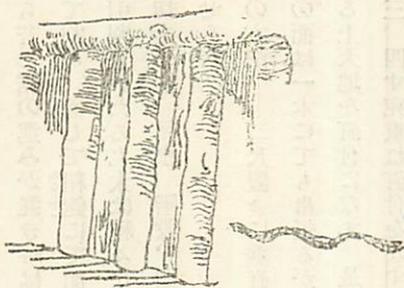


Fig. 17

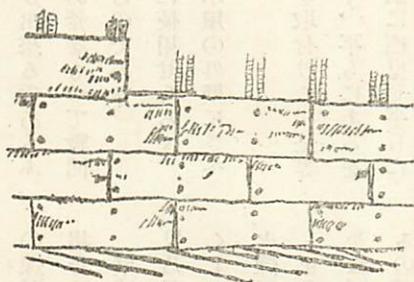


Fig. 19

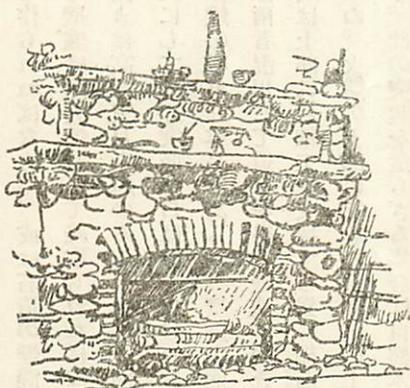


Fig. 20

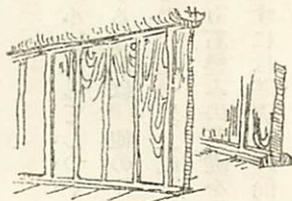


Fig. 16

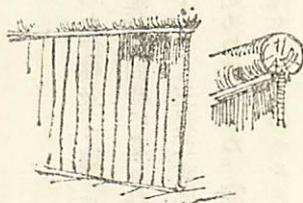


Fig. 15

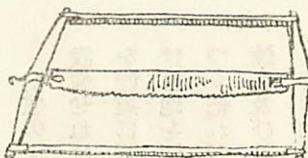


Fig. 18

梓鋸は巾二寸長さ四尺にて巖丈なる梓の中央に定着せられてある。鋭き鋸なれば譯もなく引割る事が出来るであらふ然し乍ら若し鋸の進みが遅き時は、巾廣の斧をもつて數回打込みて割る、而して粗鉋くわじにて面を調へるのである。

斯く引割られたる丸太は種々なるものを使用せらるゝ。例へば切妻の端、屋根、階段、棚或ひは小屋の外壁にさへも使用せらる。

第四の方法——二尺置きに垂直に小割を取付ける、是等の小割の面は一本にても出張るがことなく、平らにあるを要し然る上天地を釘付になす。是等の小割に樹皮を平らに又端は三、四寸宛重ね釘付をなす(第十九圖)樹皮にて屋根を葺く方法と同じである。

煙突——小屋にしてしつくり、適つた煙筒及び爐フレイヤリス端を備へむとするなれば、他の仕事の進行と同時に造られてゆかねばならぬ。先づ岩上或ひは地下少くも三尺五寸掘下け堅土の上より石疊みの基礎を作り始めねばならぬ。鞏固なる工事をなすには基礎は煙筒と同様セメントのモルタルをもつて積重ねてゆかねばならぬ。

壁爐——壁爐(第廿圖)は耐火煉瓦、煙筒其他には通常の煉瓦にて作られねばならぬ、或は石造の煙筒を採用する場合にても壁爐は耐火煉瓦にて縁取られねばならぬ。

壁爐の開きは高さ三尺を越ゆることはなく而して巾は三尺乃至五尺にして、煙突吸込口は深くなければならぬ。斯くする時は煙の吸出し容易であらふ。壁爐の面は石材、耐火煉瓦或は兩者混用にて造るを得。壁爐の開きはアーチ型とせられ或は上部に石細工を支持する爲に楣石メイスを横に据置かねばならぬ。火爐の上部に突起を造り其の上に棚を備へるのである。此の突起を造らざる場合は自然木の腕木にて棚を支持するのである。

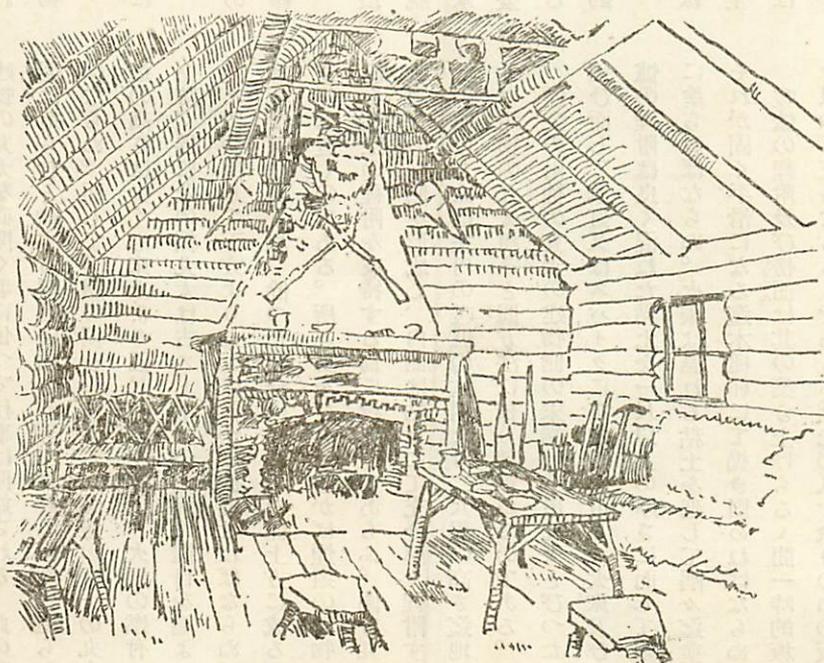
壁爐の大きさに應じて一尺四方乃至一尺六寸四方の煙道を設備せねばならぬ。煉瓦の代用として下水工用のタイルを煙道に暫々使用することがある、然し張付を忽にする時は目地めじを開かして其の割目より火を發し木材に燃えつく怖れがある。煙突の周圍より雨水の漏れるを防ぐ爲に煉瓦及び柿葺屋板との接する仕口しぐちの上をトタン板にて當合ふ時は雨水は屋上を流れ走るであらふ。このトタン板は煙突に添ふて折曲け、煉瓦積の仕口に當てられたトタン板下

にて重ねる様になす。若し屋根がけはしき時は煙筒は軒に置かれ、其の頂きは棟木よりも余程低く造らるゝ。然し此の場合頂部はアーチ型に被ひを造り兩側を開放せねばならぬ。

煙筒——煙出しの爲鐵板造の筒を使用せんとならば余分の肘筒を造らざる限り屋根をぬいて突出さす。柿葺に接する個所は亜鉛鍍金の鐵管或は煙筒よりやゝ太い土管をもつて屋根を保護す、又は筒穴を貫きたるトタン板を當合ふ、此の筒穴は屋根の勾配に適合するやう輪縁を有し、輪縁は柿葺の下に押入れ屋根に釘付になす。

漏斗型暖爐——此の様式の暖爐の底部は石積みメントにて固める、或は煉瓦もしくは粘土をもつて八、九寸の厚さに積上げて造らねばならぬ。

此の火床は四尺五寸平方位にて而して丸太枠にて取囲まれてあらねばならぬ。此の基礎の上方一尺五寸許りの位置に、大鐵板にて造りし漏斗型煙筒垂下する。最下部にて直徑三尺、上に行くに従つて細まり煙筒に連續す、此の煙筒の徑は約一尺位あらねばならぬ。煙筒



は天井より垂り下げられ、その上端は屋上に突出す。これが完成の時は暖爐を四方より取圍みて冬の夜長の樂しき物語りのうちに温もる事が出来る。

この式は火熱を八方に豊富に放散する故室内の中央部に備へる時は小屋内を具合善く温めるであらふ。

鐵瓶掛——(Fire Crane)——相等年輩の仁には親しみのある古風ではあるが便利なものである。これは硬質の鐵棒にて造られねばならぬ。

水平の部分は頬杖にて支持せられ、その垂直の鐵棒は頂部及び底部の軸承にて鐵ピンを差込まれ容易に軸承より脱出せざる様になされ、樞機スヰヰの如く造られてある。この軸承は石工の手にて煉瓦積の際嵌込まれてあらねばならぬ。爰に謂添て置くが暖爐は石工に依つて築造せらるゝのである。この鐵瓶掛の腕にフツクを附し、夫れに藥管、鍋等を釣下けるのである。

粘土塗暖爐及び丸太積煙筒——此の種の暖爐及び煙筒は注意を以つて造られ、常に善く繕はれてあらねば余り安全なものではない。然し乍ら風雅の點ではこれに優るものは他にはない。先づ暖爐を備へんと欲する位置を豫め定め、

建物の丸太を砍開く事に依つて仕事は開始される。此の砍開は造らむと欲する暖爐の幅よりも二尺許り幅廣に造らねばならぬ。而して暖爐の楣カドを形成する、爐邊の直上の丸太迄の高さは少くも床上より四尺あるを要す。火焰の燃付くを防ぐ爲に此の楣丸太は古ストーブの煙筒の繼目を端より端まで切開して下方より丸太に當がひ被覆せねばならぬ。

鐵板は釘付にされ、餘つた部分は暖爐の内側上方に成る可く延し置くのである。所々釘を打付け置かば煙道の建物の側を粘土の裡附を支持する爲に役立つであらふ。圍ひ丸太は煙突の外側を形成し、内側は粘土にて充分厚く裡附す。此の圍ひ丸太は室内の暖爐の砍開より二尺程の高さ迄地上より建物の丸太組みと同方法に依り積重ねるのである。

煙突の兩袖の丸太の建物側の末端は小屋丸太とびつたり適ひ而して木釘又はスバイクにて定着す可し。火床及び暖爐の裡附は良く混ねた粘土を一尺以上の厚さに而して堅固に塗らねばならぬ。火床は濡れる粘土を延して隅々迄塗りそれが固く平滑になる迄木槌杯にて搗き固めねばならぬ。暖爐の裡附及び傍面は其の築き上げらるゝ間一時的板張を以つて支持せらるゝであらふ。先づ八寸余りの巾の板に

築造せんと欲する暖爐を正確に型作り底部の板圍をなす。  
是等の板圍は堅固に支持せられ、其處へ粘土を詰込むので  
ある。斯くして第二層、第三層と板圍をなして粘土を詰め  
て行く、此の施工は粘土裡附が煙筒の暖爐の部分に當る丸  
太の最後の層と平面となる迄續けらるゝ、此の邊より煙筒  
の頂部に達する迄直径二寸位の丸太にて積みゆき、暖爐部  
の粘土の平面と平均するやう粘土の固練りのモルタルにて  
塗上げる。煙道が築造せられたる後、押へ板を暖爐より取  
外し、粘土の表面をやゝ濕らし、鋤を以つて平滑になす。  
粘土はそれに少量のセメントを混和する時は堅牢になるで  
あらふ。然しセメントを粘土に混入するは粘土を塗る眞際  
迄なしてはならぬ、何故なればセメントは速かに凝固する性  
質を有するからである。爐邊の床は粘土を積上げた上に平  
滑な面を上部にして置き並べられねばならぬ。

斯くして小屋の力仕事は完成し、仕上の手際に注意を拂  
へば善いばかりである、而してキャンブ・ライフの愉快と  
安逸に適ふやう如何なる物をも追加することが出来るであ  
らふ。



# 「聖山」批評

加納 一郎

氷と雪とによつて表徴せられる一つの思想がある——と私には思はれてならない。どんな思想かといはれると一寸困るけれども、近代人の氷と雪への憧憬は年とともに、日とともに熾烈となり、その外形的のあらはれとして、登山やスキーの隆盛を擧げることができる。或はまた近年の極地探検のごときも、單に航空機の發達やラヂオ通信の進歩のために新機軸が出されたものとのみ見ることはできない。

北、冬、山岳、スキー、恒雪、氷河、冰山といったやうな名辭は何となき誘惑的な感じをもつて、吾々の心を引緊め、人々はそこに何らかの理想を夢み、そこにまで到らんとする欲求は、敢て生命をも犠牲にして、はゞからぬほどに強い。それは單なる未知の究明といふやうな古臭いもの

ではなく、もつと形而上的であり、また變窟な人々の所謂ヘーエンワルデル・ルストよりも、もつと深刻なものである。それはアムンゼンがノルゲ號の探検に先だつて發表したステートメントの中にもうかゞはれるとほり全人類的なものである。

極地の探検や山岳の登攀、或はスキー旅行などが、今日大衆の注目を惹いてゐるのは、たゞ人々のもつ冒險心を刺戟するためばかりではなく、氷と雪の世界に對する關心の深められたによることを否むわけには行かない。

かくして氷と雪への歩みは、山岳家や探検家のみに限らず更に廣く、全体の人々の心を支配するまでに到つた大衆はよく自ら恒雪を踏み、氷原を渡らずとも、極地に對して異常な注意を拂ひ、山岳界の出來事に大なるセンセー

シオンを感じるのである。だから氷や雪を多く取材せる藝術品は従来よりも遙かに多くの人心をとらへ、その作品は益々頻出するにいたるであらう。

私はこんなことを考へながら映畫『Der Heilige Berg』を見た。

アーノルド・ファンク氏の名とその技能は『スキーの驚異』の映畫、著作を通じて既に既に親炙せるところであるが、今度の制作『聖山』もこれと對比して考へざるを得ない。

主役に有名なタンツェリンのリーエンシュタール嬢をもつて来て自然を題材とせる舞踏をとり入れ、舞姫を廻るに二人の山男を配して三角關係をつくつたところは、前映畫よりは一段人間的であるが、しかしこれはシナリオとしては別に珍らしくない。たゞローデとデオテイマ（リーエンシュタール）との山中の會話

「山のもつと上の方へ行けば美しいでせうね」

「美しいですとも。しかし危険ですよ。」

「ぢや、あなたはなぜそんな危険なところへ行くんです。」

「吾々が山に登るのは自己を知るためなんです。」

「それだけですか、その他に——」

「それが全てです、あなたはそのほかに何を望むのです」

「私は自分を知るばかりでなく、他人をも知りたいのです」

といふやうな場面や、ローデの「山は何か知ら、あの寂しさの中に私を引きつけるものがある」といふ言葉に對してデオテイマが「では、あなたも恰度、山のやうだ」といふあたり、山男は考へるだらう。

ジャムプの場面もあるが、これはシュナイダーの弟君がでよくるほか、大したものではなく、前の映畫ほどに參考にはならない。長距離競走の方も、例の通り大アルプスの滑降で、急斜面の直滑降といひ巧みな廻轉滑降といひ、前映畫と大同小異ではあるが素晴らしいことは何度見ても氣持がよい。おなじみのシュナイダー自身は一、二度顔を出すだけであまり活躍してゐないのも物足りない一つだ。で、總じてこの『聖山』はスキーや山のテクニクの方から見ると「涙のこぼれる」ほど大したものではない。——と云ふのも『スキーの驚異』を見てゐるからの話であるが。

全篇を通じて、山の神々を裏切つて女につくことはできない、女を神と置きかえることはできない、女と山を輕ん

じてはならないといふやうなテーマが流れてゐる。親友にして戀敵たるローデとヴィゴの二人が、ノースウオールの氷壁に一本のザイルでぶらさがりながら、風雪の中に夜を送る間に、ローデの夢の場面として、氷雪の祭壇に白い焔が燃える殆どセットばかりの所があり、見方によつてはいろ／＼神秘的に考へさせられる。最後にローデは、墜落してザイルにぶらさがつてゐるヴィゴを助けることもできず彼を見殺しにして自分だけ助からうともせず遂に二人とも墜死して「山の上で結ばれた友情は山のやうに永くつゞく男の女に對する愛情よりも、より強きものは友情である」といふタイトルで終つてゐる。

波や雲や溪流の動きを巧みに寫してゐるところ、岩壁、雪の大斜面、山の小屋、小屋の窓ガラスのジャック・フロスト、樹氷、樹冠の雪、雪庇その他、あらゆる氷雪の現象を捉へて光線を思ふまゝに驅使してゐるところ、一コマ／＼は寫眞として秀れたもので、この點さすがにファンクの名をはつかしめない。

で結局スキーや山の技術本位にあまりに大きな期待をもつて見ると失望に終るかも知れないが、氷や雪を中心とし

た、多少とも藝術的な一つの作品としては、全く吾人の嗜好に合致したものであるといふことができる。

この映畫を常設館に上映して、わが國の一般大衆からどれだけの稱讃を博するかは、いろ／＼な意味に在いて興味がある。(二〇月一日、試寫を見て、大阪)



# ス キ ー 年 鑑

(1927—1928)

今年の年鑑は國際オリムピックスキー大會第一回日本選手派遣記念號として發刊することに致しました。従つて内容はオリムピック選手の報告及感想等を第一として、次いで可及的豊富にオリムピック土産の寫眞を挿入することにしました。他に本年度代表委員會に附議せる決定事項、規約、規定の改正等編入して居ります。

大きさは昨年通り菊版假製綴としました。

發行豫定日は十一月下旬であります。

定價は實價で金一圓であります。

申込みは各加盟スキー團體で纏めて聯盟本部に申込んで頂けば甚だ好都合であります。又個人的に直接聯盟本部に申込んで下されても宜しうござります。

全日本スキー聯盟

東京市橋區宗十郎一町

岡村源太郎遺稿集

# スキーデイズタンスレース

完成

限定五〇〇部

体裁 菊版 三三〇頁 假製綴

紙質 上質紙 寫眞版六葉

實價 金貳圓

發兌 札幌 山とスキーの會

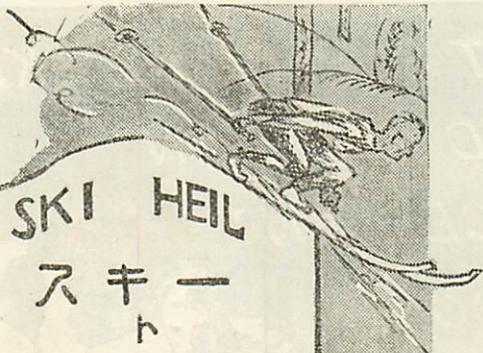
小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會

全日本スキー連盟

東京市京橋區京十丁目一



SKI HEIL

スキ一  
ト  
其用與全般

中野商店

スキ一印スバ

第一  
製 廠  
斯 大

札幌



GET SUPERFINE SKEES.  
 AND MAKE AN  
 EXCELLENT  
 RECORD!



優秀ナスキー其具用

小樽

梅屋運動具店

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第  
領受牌金賞等一



# 靴一キスと靴山登

.....

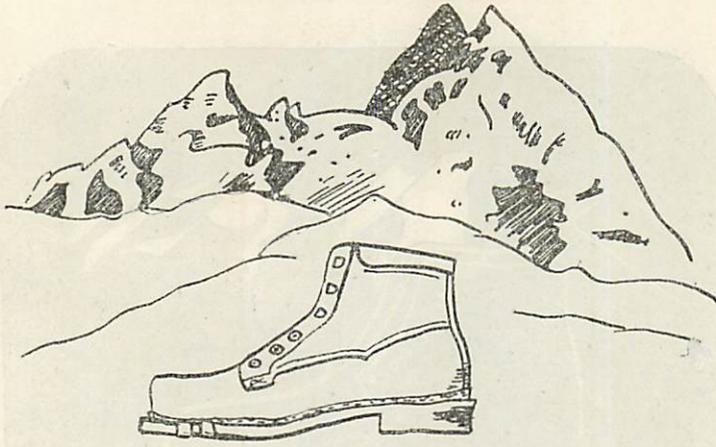
角目丁四區郷本市京東

## 店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

北海帝國大學キス一部及同岳部御用



# 登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十街

## 木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

### 定 價 金參拾錢

\*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年十月廿八日印刷

昭和三年十一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行 者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替小樽八四九五番

La Gazeto  
de la  
Monta kaj Skia Clubo  
No. 87. Nohembro 1928. Sapporo. Japanujo.

美滿津製 山スキー！

山の道具各種

アイス・スケート、ボツアスレー、スレツチ

アイス・ヤツト 其他



合名會社 美滿津商店 東京・本郷  
赤門前

電話 (小石川) 八四五・二〇七一

大正十五年七月二十七日第三種郵便物認可  
昭和三年十月二十八日印刷  
昭和三年十一月一日發行

山とスキー

第八十七號

定價金參拾錢